探檢隊派遣があつたことは能く知れ亙つて居ることである、こんな風で日に月に此邊の歴史は明らかにせられつゝある、塞外の地といへば東洋史の上でもやゝもすれば度外に付する様な傾向は、前世紀迄の迷夢にすぎなかつた、支那古帝國の尨然たる歴史が杳として傳へない自からの消息を、新疆の砂の中から聞くことが出來たり、名のみ喧しい老廢の印度の國が、　とんと殘さない佛陀の福音を等しく新疆の洞穴から囁き出すなど、　實に快心の極みである、昨年末我が學界を騒がせた佛人ペリオ氏の敦煌の遺書の發掘の如きも、實にまた中央亞細亞探檢の副産物といふべきである、今本年一月巴里地理學會發行の la Geographie 及び、同三月巴里發行の l'Illustration によつて同氏旅行の大概を述べて見やう。

一行は三人で、ペリオ氏は考古學、史學、言語學、ヴェイヤン (Vaillant) 氏は地圖、天文、博物、ノウエット (Nauette) 氏は寫眞と各々其分擔を定めて新疆諸地の發掘研究を目的とした、殆んど一年間を準備に費やして、千九百六年六月十五日に巴里を出發し、モスコウ、オルエンブルグ、タシュケンドを經て魯領トルキスタンの鐵道の終點アンディジャンに達し、茲に鐵路と別れてオシュに至り、いよ〳〵大旅行の緒を開いた、駱駝七十四頭の一隊を率ゐてアライ (Alai) の谷間からパミール (Pamir) の北邊をすぎて終に目的地たる支那トルキスタンに入り先づカシュガル (Kachgar) の研究に着手した、茲ではイスラム教侵入以前の佛教の有様を知るのを目的にして一ケ月許り滯在し、多少の資料を得て後クッチャに向つたが、ほゞ半途にして曾てヘディン氏等が報告したるトゥムシュク (Toumchouk) 附近の一遺跡に着いて、ガンダラ式の小佛像を發見したのを端緒に、彫刻した木片、貨幣、陶器、神像などを澤山採集した、千九百七年正月の始めにクッチャに到着して名高い千佛洞を見た、これは既に佛蘭